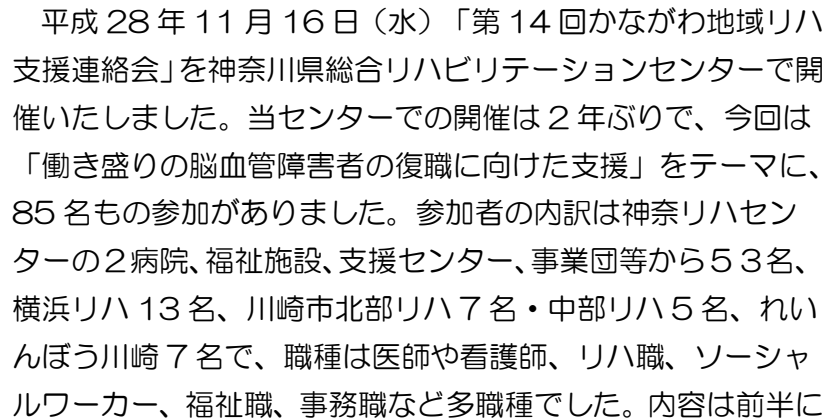


(神奈川県リハビリテーション支援センター)

地域リハ支援センター

テーマ：働き盛りの脳血管障害者の復職に向けた支援！



リハビリテーションは病気の治療や機能訓練だけではなく住み慣れた地域で安心した暮らしを構築していく総合的な取り組みです。今回のテーマの働く世代の方が病気や事故に遭遇した時、また後遺症により生活状況が大きく変化した時、仕事の復帰や、これからの生計や生活の仕方を再構築していくなどの道筋を立てる支援をすることが総合的なリハビリテーションです。今回、参加者はあらためて、復職に向けた他の専門職の視点やアプローチの仕方を学び、地域による制度の違いや活用の仕方を知る必要を感じ、それぞれが専門職として担うべきこと、そして自分たちが多機関へ繋げていく役割の大切さを実感したようでした。これからも県民の安定した暮らしを支えられるよう、かながわ地域リハ支援連絡会は神奈川県総合リハの底力をアップしていくよう取り組んでまいります。

(蒔田桂子)

脳血管障がいがある方活動と参加～働く世代の地域・社会生活を学ぶ～

特別講演：「脳血管障がいのある人の活動と参加」

長谷川 幹先生(三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長)

シンポジウム : 井口 恵(介護支援専門員)・山崎 純一(作業療法士)
泉 忠彦(職業指導員)・当事者

平成 29 年 2 月 25 日(土)13:00~16:30 会場：横浜情報文化センター

脳卒中の後遺症が残った時、地域で暮らすための課題について学びましょう。
支援には医療、介護、福祉、行政関係など各分野の連携は欠かせません。参加者の認識や課題を共有し、ともに考え、ネットワーク作りの機会に！

詳しくは **地域リハ支援センター** を検索。

リハ専門研修報告 「知的障害の方の身体機能低下への対応」



誰もが年を取ることは避けられません。知的障害の方の加齢の影響は10～20年程早く出現すると言われています。当事者がより良く年を重ねることができるよう、支援者に向けて12月6日、13日の2日間の日程で研修を開催しました。

栗原医師からは知的障害に伴うことの多い自閉症や脳性麻痺、てんかんについての医学的な知識の理解を深めました。神奈川県知的障害高齢者問題研究会の会長佐竹氏の講義から、高齢知的障害者の入所施設の抱える課題は、胃瘻や吸引等の医療的処置が必要な方の入所継続の難しさ、65歳時の介護保険サービスへの切り替え、施設の人材不足など多岐にわたっていることが分かりました。

また、理学療法士の平田からは知的障害の方の筋力は若年時から健常の40～60%と弱いこと、加齢に対しては現状の把握と予防的な対応の重要性をお伝えしました。

理学療法士の森田からは、介助が必要な方へ人の自然な動作に基づいた支援方法について実技、体育科の殿村からは楽しく体を動かす運動の体験、グループワークでは参加者の施設での取り組みや課題、チェックリストの試作を行いました。所属施設を越えた課題の共有と解決の足掛かりができた実りある研修となりました。



さがみ野ホーム 佐竹氏

【講師】さがみ野ホーム 佐竹昇平氏 地域リハ支援センター 平田学 蒔田桂子

神奈川県リハビリテーション病院 小児科 栗原まな 理学療法科 森田融枝 体育科 殿村希世子
(平田 学)

福祉用具体験会 見て・聞いて・体験してみよう!

12月21日水曜日、座間養護学校において、福祉用具体験会を開催しました。今回は、ダブル技研株式会社、渡辺商事株式会社、ユニ・チャーム株式会社、アビリティーズケアネット株式会社、積水ホームテクノ株式会社、株式会社ミクニ、株式会社竹虎、株式会社ハーツエイコー、株式会社モリトー、有限会社広井テント(敬称略・順不同)の10社にご協力頂きました。福祉用具は、視線や外部スイッチで操作する各種コミュニケーション機器、栄養食品やオムツ、シャワーチェアなどの入浴関連用具、用途に合わせた様々なタイプの移動・移乗用リフト、避難用具として「ほいさっさ」や「おんぶ上手」、「JINRIKI」を展示しました。そして今回は、すべての業者から15分程度の機器説明をする時間を設けました。ユニ・チャーム様、渡辺商事様には試供品を配布して頂きました。参加された保護者の方は、身近な学校で行う福祉用具体験会とあって、お子さんと一緒に来場されて、今後の子供の成長に伴って必要となる用具について体験しながら相談されていました。当日は65名の来場があり、とても盛況な体験会となりました。



in 座間養護学校



(一木 愛子)

リハ専門相談 事例紹介シリーズ④「家事動作と ADL」

自立への第一歩！

自助具を使ってら〜くらく



70代の慢性関節リウマチの女性の方の相談です。今回支援者の方より、日常生活で自助具などを使って、少しでも自分でできることが増えて自立に繋がらないかということで相談を頂きました。そこで本人のニーズである①冷蔵庫の開け閉め②冷蔵庫の中からの取り出し③靴下の脱ぎの動作へ助言を行いました。この方は朝夕にヘルパーが訪問し介助を受けながら、一人で日常生活を送っていらっしゃいます。

身体状況は、手指は関節の腫れや変形が酷く、肘も屈がりにくく、足、膝、股関節にも制限がありました。そして、立位や歩く際に両方の踵が重なり、動作がしづらくなっていました。家の中は両杖を使用して歩き、日中は昇降式の椅子に座り過ごしていらっしゃいます。手の届く範囲に制限があり、食事はスプーンを延長して、靴下脱ぎは杖を使い何とかやっていた他は、ほぼ介助が必要な状況でした。本人のニーズを実現するためにリーチャーを紹介し、動作方法を助言しました。



ニーズの①の冷蔵庫の開け②の冷蔵庫の中からの取り出しはフックを使い、冷蔵庫の中からの取り出すものに引っかかるように工夫をする。ニーズ①の冷蔵庫の開けは歩行で使っている杖を使って閉める。ニーズ③の靴下の脱ぎはリーチャーのフックを靴下のゴムの部分に引っ掛け、足に添わせながら、押し出し脱いでいく。以上の方法を提案した後、動作を確認し「楽だわ」という感想を頂き、今後の生活での継続をお願いしました。

今回の方のように、身体の状態にあった自助具を使用することで動作が楽になる、さらにはできるようになる方もいらっしゃいます。身体の状態に合わせて適切に自助具を選び、支援することは自立への第一歩となると思います。作業療法士はその人に合った自助具の情報提供などやうまくできる方法を提案し、その人が生き生きと生活が送れるように、豊かな生活づくりをお手伝いする専門家です。地域で支援されている方でお困りの方がいらっしゃいましたら、身近な作業療法士などのリハ専門職、もしくは地域リハビリテーション支援センターまでご相談ください。何かいい糸口が見つかると思います。

(一木 愛子)

4～12月	相談件数	訪問件数	来所件数	訪問・来所の目的	訪問件数	来所件数
神経・筋疾患	25	10	8	補装具福祉機器	20	18
脊髄損傷	11	0	7	住環境整備	14	3
脊髄疾患	14	9	5	身体機能評価	5	0
骨関節疾患	10	3	1	ADL指導	1	0
脳性麻痺	35	18	12	訓練プログラム指導	3	0
脳血管障害	17	8	5	介護指導	5	1
後天性脳損傷(CVA以外)	7	0	1	支援検討 他	5	16
内部疾患	3	1	0	補装具判定等	0	0
知的障害	9	4	0	医療	0	4
その他(加齢・切断等)	5	0	4	その他	0	1
合計	136	53	43	合計	53	43

平成 28 年度高次脳機能障害セミナー実務編

12月10日（土）神奈川工科大学厚木市子ども科学館にて、高次脳機能障害セミナー実務編を開催し、医療、介護、障害等様々な支援者の方 75 名にご参加いただきました。今年度は介護保険関係の支援者の方の参加が多い傾向でした。講演の副題を「回復のプロセスに沿った対応と課題」として、高次脳機能障害のリハについて、医師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士、職業指導員、支援コーディネーターそれぞれの立場から講演を行いました。受傷・発症から社会参加までには、急性期、医学的リハ、社会リハを経過することになり、安定した生活を送ることが大切になります。安定した生活を送るためには、身体機能、認知機能、行動・情緒のそれぞれが土台となり、整っている必要がありますが、その人らしさを引き出すような生きがいのある活動や意欲、さらには家族や仲間の視点等、多面的で包括的なアプローチが大切になります。このような包括的なアプローチを行うには、多職種の連携が不可欠になりますので、医療、介護、障害、就労等の支援者同士の連携が図れるよう、今後も意識していきたいと考えています。（佐藤 健太）

平成 28 年度第 2 回神奈川県高次脳機能障害 支援ネットワーク連絡会

平成 29 年 1 月 13 日に、大和市の大和市障害者自立支援センターで、平成 28 年度第 2 回神奈川県高次脳機能障害支援ネットワーク連絡会（以下、NW 連絡会）を開催しました。大和市障害者自立支援センターでは、毎月第 2 水曜日に「当事者・家族懇談会」を開催しておりますので、NW 連絡会では経過や現状について報告をしていただきました。私たちコーディネーターも参加させていただいている当事者・家族会は、神奈川県内（横浜・川崎を除く）では 8 か所あります。また、高次脳機能障害の事業の正式名称は、「高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業」であり、「その関連障害」とは失語症を指しているとされており、今後は失語症の集まりにも参加をさせていただく予定です。

支援コーディネーターが受けるご相談の中には、数年、十数年、時には数十年支援に繋がらず生活をしている当事者やご家族から相談が入ることがあります。高次脳機能障害の支援が始まった 10 年ほど前は、長期間支援に繋がらないケースの相談が多かったようですが、最近はそのような方は多くありません。これは、地域の支援者や医療機関のソーシャルワーカー等の高次脳機能障害に対する理解が増していることが要因の一つではないかと意見があがりました。しかし、今でも受傷後数年間支援に繋がらないケースの相談もあり、拠点機関だけではなく、地域の医療機関、介護、障害福祉の事業所等を含めて、お互いが情報交換・情報共有ができる体制がスムーズな支援に繋がると考えています。今後も様々な機会での連携を大切にして、支援の体制作りをしていきたいと思います。（佐藤 健太）

リハビリテーション専門研修への貢献に、業績賞を授与しました。



伊藤 裕之先生



小泉 千秋さん

地域リハビリテーション支援センターでは専門研修、専門相談などの業務に特に貢献した方に業績賞を授与しています。今回は、「摂食・嚥下のリハビリテーション」の研修講師として 10 年以上講師を務めた耳鼻咽喉科の伊藤裕之先生、理学療法士の小泉千秋さんに授与しました。お二人の講演は医療・介護・福祉の専門職を対象にわかりやすく、丁寧な講義内容は、受講生からのアンケートで常に高い評価を受けてきました。今後も充実した講義を期待します。（泉 忠彦）

〒243-0121 神奈川県厚木市七沢 516
神奈川県総合リハビリテーション事業団
地域リハビリテーション支援センター
TEL:046-249-2602 FAX:046-249-2601